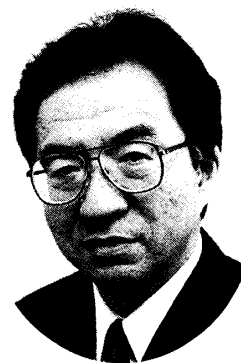


岩手医科大学歯学会30周年記念シンポジウム
「歯科における先端医療の現状と将来」

インプラント治療 — 抜歯窩即時埋入と骨移植 —



なかさと歯科医院 中里 滋 樹

近年インプラント治療は歯科治療の中で予知性のある治療法として確立されてきている。

演者は1989年よりブローネマルクインプラント治療を開始し、今年までの15年9ヶ月間に、1125本のインプラント体を埋入してきた。

最初の10年間は臨床技術、インプラント体の材質などの問題から、埋入した553本の10年間の成功率は94%であった。

しかし近年インプラント治療はインプラント体の材質が更に向上するとともに、インプラント体の表面がスムーズサーフェイスからラフサーフェイスに変化してきた事や、画像診断などの進歩により、飛躍的に成功率が高まってきている。

演者も2001年4月以降ラフサーフェイスのインプラント体に変更し、今日まで372本のインプラント体を埋入してきたが、この間、オッセオインテグレーションしなかったインプラント体や経過観察中にインプラント体が脱落した症例は経験していない。

このようにインプラント治療の成功率が飛躍的に高まった事により、抜歯窩即時埋入や即時負荷、早期負荷など症例に応じて、積極的に臨床応用するようになってきている。

抜歯窩即時埋入は、抜歯後の治癒過程における抜歯窩周囲の骨吸収がほとんどないため、骨量に恵まれた環境でインプラント体を埋入できる事や、唇側歯肉や歯間乳頭部の退縮による問題を最小限に抑え、審美的回復を容易にさせたり、治療回数、治療期間を短縮させるなど、多くの利点を有している。

しかし抜歯窩はいろいろな形態を有し、埋入したインプラント体と抜歯窩の間に大きなスペースを生じて治癒を遅れさせたり、抜歯窩が1～2壁性の骨欠損ではインプラント体の露出が大きく、オッセオインテグレーションを困難にする症例も多く経験する。

そこで演者はこのような症例に対し、積極的に自家骨移植やチタンメッシュを併用してこれらの問題に対応してきている。

最近2年間の抜歯窩即時埋入インプラント数は64本であるが、特に異常なく、現在良好な経過をたどっているので、今回術式を含め、骨移植症例とともに臨床例を供覧したい。